

月
刊

いろいろのとも

第十四卷
四月号

愛・寛容・慈悲の欠如

自己肥大

極致に至り

寛容も

慈悲も欠きたる

日本に

どんな未来が

待ち受けている

ああ

慈悲寛大も

自我没却も

いったい

どこいったんやあー

自己に閉じた哲学者

哲学者

自己に閉じたる

哲学で

危機を打開と

言う愚かしさ

香川県全国一位のもの

香川県が

全国一位のもの

少年非行発生率

交通事故死亡率

児童相談所相談率

人生を考え直して

みたい人は（一一一）

— 空海『即身成仏義』解説（一四）—

「（四）— 4 『大日経』「悉地出現品」と六大説」

また云く、大日尊の言（のたまわ）く

「金剛手、諸（もろもろ）の如来の意より生じて業戲（ごつけ）の行舞（ぎょうぶ）を作（な）すこと有り。広く品類（ほんるい）を演（の）べたり。四界を撰持（せつじ）して心王（しんのう）を安住し、虚空に等同なり。広大の見（けん）・非見の果（か）を成就し、一切声聞、。支仏、諸の菩薩の位を出生（しゅっしょう）す。」と。

この文は、何の義をか顕現するや。謂く、六大能（よ）く一切を生ずることを表す。何を以てか知ることを得るや。

謂く、心王とは識大なり。撰持四界とは四大なり。等虚空とは空大なり。この六大は能生（のうしよう）なり。見・非見とは、欲・色界・無色界なり。下は文の如し。即ち、是れ所生（しよしょう）

の法なり。

此（かく）の如くの経文は、皆六大を以て能生と為し、四法身、三世間を以て所生と為す。この所生の法は、上（かみ）、法身に達し、下（しも）、六道に及ぶまで、麤細（そさい）隔てあり、大小差あ他と雖（いえど）も、然（しか）れどもなお六大を出でず。故に仏、六大を説いて法界体性と給う。

今回は、このシリーズの第一回目に引用させて頂きました『弘法大師空海全集第二巻』（筑摩書房刊）の中の松本照敬訳注の現代語訳を、引用させて頂きます。

また、『大日経』悉地出現品に説かれている。

「大日如来がお説きになる。——『金剛を手にする者よ。われは、あらゆる如来の意から生じて、人びとを教え導くための行為ふるまいを為すのである。広く種々のものを現し出し、それぞれの役割を演じさせ、四界をまとめ保つて、精神的なものに安住させ、偏在することあたかも虚空に等しい。広大な見える世界・見えない世界を完成させ、さらにはそうした世界をも超越するすべての教えを聞いてさとる者・独自にさとる者・諸々の菩薩の境地をも生み出すのである』」。

質問して言う。――この文章は、どのような意味を表すのであるか。

答えて言う。――「六大」が、あらゆるものを、よく生ずることを表している。

質問して言う。――何をもちて、そのことを知ることができるか。

答えて言う。

精神的なもの「心王」とは識大のことである。

四界をまとめ保つ というのは、地・水・火・風の四大のことである。

虚空に等しい というのは、空大である。これら「六大」は、「生み出すもの」である。

見える世界・見えない世界 とは、欲望を有するものの住む世界・清らかな物質より成る世界・物質を超越した世界である。それ以下は経文のごとくである。

すなわち「生み出されるもの（所生）」である。

右にあげたような経文は、みな、「六大」をもちて「生み出すもの」とし、四種類の仏の身体・三種類の世界を「生み出されるもの」としている。

この「生み出されるもの」は、上（かみ）は宇宙の真理を体現している仏から、下（しも）は、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六つの存在領域の生きものに及ぶ

まで、粗大なものと微細なものなどの差異がある。ただし、大小の差があるとはいっても、なお、「六大」を超え出ることはない。それゆえに、仏は、「六大」を説いて、宇宙の本体とされたのである。

* * * *

ここでは、『大日経』悉地出現品に基づいて「六大」が、人間精神を含めて、この世のあらゆる存在を生み出す「宇宙の本体」、哲学的に言いますと「宇宙根源の原理」であることを説いているのですが、注意しなければならぬことは、「六大」の地・水・火・風・空などは、いずれも物理的にこの世に存在するものですので、つい、それに具体的に思いがいつてしまつて、そうした物理的なものが、あらゆる存在を生み出すと言っている、と考えてしまうことです。そうではありません。

それらは、論理的な概念として構成されたものなのです。前にも書きましたが、解脱の境地に基づいて、解脱にもつとも至りやすいように構成されたものなのです。

なお、「四種類の仏の身体・三種類の世界」とは何なのか、につきましては、本年二月号をご参照下さい。また、その他の概念（言葉）につきましても、これまでに取り上げていますので、そこをご参照下さい。

自作詩短歌等選

氣付けず病む

自らの
執らわれ知れず
哀れなり
ところが病みて
身体病みけり

視界ゼロの時代

独りよがりの言論や
自分だけが
物知り顔をして
あれこれ言い募る議論が
多いという

なのに
一人として
先に見える人が
いない

民間出の校長自殺

広島で
民間出身の校長が
自殺した
うつ病だったという
責任感が強く
真面目な人だったに
ちがいない

教育界を

よくしようとする
過重な期待が
一人の間人を
死へと追いやった
校長を代えたぐらいで
学校がよくなると
考えること自体が
間違いだ

なぜなら

今の教育を支える

教育哲学そのものが

間違っているのだから

日本核武装論

アメリカで
日本核武装論が
提唱されているという

北朝鮮の核武装に

対抗するため

日本・韓国も

核武装したいなら

したらどうか

というもの

いよいよ日本にも

核武装の時代が

やって来る

執着すれば不幸せ

自らに
執着するを
幸せと
思い違いて
不幸になりぬ

知らず業を背負わす

迷惑を
かけなきゃいいと
言うけれど
他者に背負わす
業ぞ最大

国家神道の復活

教育基本法の改正原案に
愛国心と
宗教的情操の育成を
盛り込みたい自民党
与党なのに
抵抗する公明党

だってえー

愛国心に宗教とくれば
日蓮宗ではなくて
国家神道の
復活なのでしょう？

閉じていながら

自らは
閉じていながら
他人には
おのれ押しつけ
好意欲しがる

あたまだけ発達

あたまだけ
発達してる
現代人
からだところ
ますますしぼむ

どこまでも

こころしぼめば

不安定

おのれを守り
おのれが滅ぶ

インターネット利用法

インターネットの

利用法も

いろいろあるねえー

売春相手を探したり
自殺相手を探したり

国際社会の崩壊

各国の
利害異なる
国際社会
利害で動けば
世界は分裂
待っている

信の無いのに気付けど

自らの
こころの中を
覗くほど
信をなくした
己に気付く

だがしかし
たとえ気付けど
いかにせん
意識で直せぬ
業の深さよ

ならず者国家の規制は

ならず者の
国家があつて
悪事を為すに
誰がそれを
止めるのか

国連の
安全保障理事会は
各国利害が一致せず
悪事を止める
ことできぬ

さてその後は
世界秩序の
崩壊あるのみぞ

自作随筆選

引きこもりは日本病

三月三十日付け毎日新聞の「発言席」欄は、衆議院議員の田中甲という方が、「HIKKOMORIは日本病」と題して、投稿されていました。この方は、国会議員約二十六人による「引きこもり問題対策議員連盟」の幹事をされているそうです。

引きこもりが、一〇〇万人を超え、年々、増え続けていて「背景にある大きな問題に取り組まないと手遅れになる」との危機感から、国会内でも議員の有志の方が集まって、勉強会をしてこられたようです。

この方は、記事の中で、次のように述べておられます。「特筆すべきことは、この問題が海外のメディアから注目されていることだ。議連の幹事を務める私のところには、昨年よりイギリスの放送局やアメリカの新聞社からの取材が相次いでいる。引きこもる若者の問題は海外では事例がなく日本の国民が作り出す象徴的な社会問題として分析がなされているのだ。彼らジャーナリストは、日本社会に特徴的な諸問題、つまり、親子関係の弱さ、

コミュニケーション能力の欠落、本音と建前を使い分ける二重構造、自分を見せることの恐怖、人間不信、逃避性——などを「HIKKOMORI」に重ね合わせてみている。さらには、この特有の社会病理は『日本という国には真の民主主義が生まれない』ということまで示唆していると受けとめているのである。／いわゆる日本的なしつけと教育によって引きこもりは生まれるという国内の研究者からは、伝統的なしつけをする家庭にこそ多く発生するとの指摘もある。日本文化というものの自体を改めて議論すべき、根の深い問題といえよう。」

この方のご指摘の通り、私も、確かに、HIKKOMORIは、日本特有の問題のように思います。「実は、私も、この問題について論文にしていますし、「ひびきのさと」のホームページでは、「ひびきのさとライブラリー」として載せています。ご参照いただければ幸いです。論文名もその業績欄に載せています。ご希望がありましたら、抜き刷りをお送りいたします。」

でも、次の「日本社会に特徴的な諸問題」として述べられていることが、この引きこもり現象の原因であるかのように考えられていることには、賛成しかねます。

なるほど、「親子関係の弱さ、コミュニケーション能力の欠落、本音と建前を使い分ける二重構造、自分を見

せることの恐怖、人間不信、逃避性」が日本社会に存在することは、間違いないことだと思います。でも、それは、引きこもりと次元を同じくする現象であって、その原因では、決してないのです。

ましてや、「日本という国には真の民主主義が生まれない」と外国ジャーナリストから言われていることに至っては、全くの間違いだと思います。

実は、この日本ほど民主主義が進んでいる国はないのです。でも、私は、日本人でこの点が理解できている人に出会ったことがないので、外国人に分からないのは当たり前と言えは当たり前なのです。

何度も書いてきましたので、熱心な読者の方には、お分かりだと思うのですが、民主主義は、どこまでも「自己（エゴ）追求」の制度なのです。そこには、決定的に他者性（他己）が欠如しています。

日本は、もともと、欧米のキリスト教とは異なった仏教国であった上に、太平洋戦争後、宗教を完全に公教育から排除させられたことで、日本人の思想といえそうなものは「民主主義」のみになったのです。

キリスト教では、人々のつながりは、私たちを超えた絶対者である神を通じて、保たれているのです。つまり、一人ひとりの「個人」が神を通じて結ばれているのです。

つまり、神が人を愛して下さり、私たちをこの世に贈って下さっている証（あかし）として、人々は、神のように他者を愛さなければなりません。それは、神を信じる証として他者と関係をもっている、ということの意味しています。つまり、そこには、自分の信仰と存在そのものの証としての強い他者性があるのです。

他方、日本の中心的な宗教だった仏教では、日本人が古来から持っていた宥和（ゆうわ）的な心性と合致して、人々の結びつきは、互いの「情動の共有」を通じて行われてきたのです。つまり、キリスト教と違って、仏という私たちを超えた絶対者を媒介とするのではなく、直接的に私たち自身が仏を宿すものとして、他者と関係をもつのです。それは、例えば具体的に言いますと、他者の痛みを我が痛みとし、他者の喜びを我が喜びとして、人々が結ばれるということです。また、日本では、人が死ねば「成仏」したと言われますように、人々はみんな仏を宿したものとして互いに関係をもっていたのです。それが他者性の根幹だったのです。

では、こうした、日本人に特有な精神構造にとって代わって、民主主義のみが自分を支える思想となったのは、どうしてなのでしょう。実は、それが、いまの日本が陥っている様々な社会病理現象の根本的な原因を作って

いるのです。以下、少し検討していきます。

千年以上にわたって日本人の精神的バックボーンをなしてきた仏教における、人と人の結びつき方について見ましたが、これは、実は徐々にはありますが、日本では、失われて来ていたのです。

それは、例えば、江戸時代で言いますと、江戸幕府によって檀家制度が取り入れられ、僧侶が墮落して、どんどんと葬式仏教化が進むことに見られるのです。つまり、仏教は日常生活での宗教としての役割を果たさなくなりつつありました。そうした状況の上に、だからこそというべきか、明治四年に欧米に追いつき追い越すために、廃仏毀釈令を出して仏教を捨てキリスト教を模した「国家神道」を取り入れました（しかし、それも、太平洋戦争の敗戦によって捨てさせられてしまったのです）。

でも、日本人特有の仏教的な、人と宥和して暮らしていくという精神構造そのものの在り方は、明治以降も当分は、かなり存在し続けていたのではないか、と思うのです。

それが、太平洋戦争の敗戦後、軍国主義に代わる民主主義の導入とともに、この日本の古き、良き精神構造までも、軍国主義を支えた悪しきものとして、あるいは、民主主義に求められる「個の確立」に反するものとして、

徹底的に排除されました。その結果、徐々に失われて来ていたものが、加速度的に無くなってしまったのです。

その結果が、先に出てきました、「親子関係の弱さ、コミュニケーション能力の欠落、本音と建前を使い分ける二重構造、自分を見せることの恐怖、人間不信、逃避性」の諸現象となつて現れているのです。

ここに出ています諸現象は、何れも他者性（他己）を欠いた人の特徴なのです。他己が弱体化しますと、基本的に他者を信じることができません。他者は、常に自分のための手段としてしか意味を持たなくなってくるのです。自分に利益を与えてくれるもの、自分を支持してくれるものだけが、つまり、自分に利用価値のあるものだけが、自分に意味をもつ存在なのです。そうなりますと、必然的に家庭内にあってもお互いは、利用しあう存在でしかありません。

引きこもりは、こうした状況でおこっているのです。家庭の中では、いわゆる力、腕力は言うに及ばず、精神力でも勝っているのは、若者です。若者が、子であることをよいことに甘えて、力で親を支配し、自分勝手に、自堕落になつているのです（勿論、対人恐怖症や赤面恐怖症、あるいは、外出や人と会うことを恐れるような恐怖症などの精神病理を含んだものもあるでしょうが）。

最後に、引用にありました、引きこもりは、「国内の研究者からは、伝統的なしつけをする家庭にこそ多く発生するとの指摘もある」という記述について、コメントしておきたいと思います。

私は、この記述を読みますとすぐ思い出す本があります。それは、平井信義著の『平井信義のしつけ無用論』（くもん出版刊）です。この方の「著者」紹介によりますと、「小児医学と臨床心理の両面から、幼児期から思春期に至るまでの子どもの諸問題を研究」されており、多数の著書があるということです。

因みに、私の蔵書リストで調べてみましたら、この方が監修したり、共著者で第一著者になったりした本を含めて著書が全部で四二冊もありました。それだけよく読まれ、大きな影響を与えておられるということです。

さて、この方の主張ですが、この方は徹底した「自由保育」を提唱されています。

例えば、「よみがえれ、自由保育」（明治図書刊）という本を読んでみますと、幼稚園の園長に対して「園長ばか、園長じじい、園長とんま、園長かいじゅう、園長あほう、園長ぶた」などと、子どもが「自由」に、かつ「創造」的に自分の感情を表現することが奨励されているような記述があります。

実は、この『こころのとも』でも、最近の子どもたちの「傍若無人ぶり」や、「幼稚園教育の問題性」につきましては何度か取り上げましたが、その原因が、この方の書かれた本にあったのかと、思えるほどです。

この方は、前述の引きこもりが「伝統的なしつけをする家庭にこそ多く発生する」と、考えられているのではないかと思えます。なぜなら、いわゆる伝統的なしつけを否定されているからです。伝統的なしつけをすることが、子どもたちを問題をもつ子に育てると考えておられるからです。

それは、例えば、この方の書かれた本に出てくる次のような記述をみれば明らかです。「子どもに服従を迫る教師や保育者は、ごう慢で、非人格的な人間である」、「まわりの人のことを気にせず、自分のありのままの気持ちを表現し、思いついたことを気がねなく行動に現していく子どもが素晴らしい」、「他人を意識して行動したり、他人に気兼ねしたりすることは、子どもの個性の発達を妨げる」など。

要するにこの方の主張は、「自己（エゴ）」の育成が第一で、「他己」は「自己」を育てれば、勝手に育つものだと考えておられる、ということです。まさに引きこもる若者たちの精神構造そのものだと思います。

釈尊のこつば（一一一一）

―法句經解説―

（三七一）修行僧よ。瞑想せよ。なおざりになるな。汝の心を欲情の対象に向けるな。なおざりのゆえに鉄丸を呑むな。（灼熱した鉄丸で）焼かれるときに、「これは苦しい！」といって泣き叫ぶな。

この偈では、修行僧への語りかけになっていますが、一般の人にも当てはまると思いますので、そのつもりで解説します。

まず、「瞑想せよ」ですが、この『こころのとも』でもたびたび、瞑想すべきことをお勧めしてきましたが、では、なぜ、それが必要なのでしょうか。

読者の方には、もうお分かりだと思いますが、人間は、難儀なことに、いくら「こうしよう」と「あたま」で思っても、「こころ」は勝手に動いてしまい、言うことや、為すことを統制することが出来ないからなのです。たとえば、自分が、「節制して健康になろう」とか、「幸せになろう」とか、「悪いことをしないで、善いことをしよう」と思っても、瞑想しない限り、そうはできないのです。

実は、瞑想しない限り、幸せとは何なのか、悪とは、善とは、何なのかさえも分からないのです。

いま、多くの人は、権力を得たり、有名になったり、お金がたまったり、何かの賞をもらったりすることが、幸せだと思っていると思うのです。そして、それが善だと思っていると思うのです。

でも、そんな事は、とても空しいことですし、間違いです。

なぜなら、そうしたことは、自分自身で決めることはできないからです。必ず、他者の決定に依存しているからです。また、権力でも、お金でも、名誉でも、得れば、いつかは失う（死ねば必ず失う）のですが、その時、多くは悲しみを伴うからです。そして、不幸をかこつことになるからです。

最高の幸せは、「何はなくても」、毎日、こころが満たされていることです。こころの中に、常に、幸福感がみなぎっていることです。ただ一つの不満は、多くの人が自分と同じような幸せを味わっていないことなのです。

あらゆる人を救うことができないことです。でも、それに執らわれません。

しかし、こうなるためには瞑想がいります。いつも言

います、ヨーガや坐禅や読経などがあるのです。そうしている時、はじめて自分が「言ったり」、「したり」、「思ったり」することが、悪を為すことにならず、善を為すことになるのです。以下の解説は省略します。

(三七二) 明らかな知慧の無い人には精神の安定統一が無い。精神の安定統一していない人には明らかな知慧が無い。精神の安定統一と明らかな知慧とがそなわっている人こそ、すでにニルヴァーナの近くにいる。

ここで難しいことばは「ニルヴァーナ」ですが、既に何度か出てきたと思います。日本語では「涅槃寂靜」と訳されます。意味は、さとり of 境地のことで、煩惱への執着が消滅し、こころが平安である、ということとです。ところで、智慧(知慧)は、一般にもよく使われることばですが、果して何なのでしょう。

悪いことばなのですが、かつて、知的障害者のことを「智慧おくれ」と呼んだことがありました。まったく間違った使い方です。この使い方は、智慧を知的な能力のこととして使っています。ですから、それは、知識の量や言語を操る能力などのことを指しています。でも、智慧はそうではないのです。知識が多く(もの知り)で、

言語能力が高くても、智慧があるとは言えないのです。智慧は、実際の現場の状況で、間違いを犯さない(悪をなさないで、善をなす)直観的・直接的な力なのです。それは、知識の量や言語能力とは、まったくといっていいほど関係はないのです。

次に、「精神の安定統一」ですが、私の人間精神の心理学モデルで言いますと、「自己」と「他己」のバランス(均衡・安定)がとれていて、かつ、「自我―人格」「認知―言語」「感覚―運動」「情動―感情」「精髄―神髄」の各精神機能領域間の統合が取れている状態です。一言でいいますと、無意識(潜在意識)の精髄と神髄が統合されていることです。意識水準ですと「自我―人格」の働きが完全になされていることです。

それは、知的能力が優れていて、情緒も安定しているだけでは達成されません。それは、多くは、今の政治家や実業家や高級官僚のように、心臓に毛が生えていて、悪賢い(ずる賢い)だけです。

それは、人生への深い洞察があり、何が善いことで、何が悪いかがハッキリと分かっていることです。幸福で言いますと、絶対的な幸福に至っていることです。真言密教で言いますと、解脱して、大楽に至っていることです。こころを磨く修行をしたときだけそうなります。

後記

一、よく天気が変わり、雨がよく降ります。今年は、畑の池の水が、常に、ほとんど満水です。

二、満開の桜の美しさは、いつ見ても、こころを打たれます。日本人は桜が大好きなようで、いたる所に植えてあつて、目を楽しませてくれます。世間は、乱れきっています、桜の美しさは、いにしえの時代と変わらないようです。

三、畑で、先日、カヤ（すすき）でおおつてあつた里芋を全部、掘り出し、種芋として適当な大きさのものを選んで植えました。三種類、植えています。里芋には、多くの品種があるようです。

四、一月中旬に植えていた、食べ残しの芽の出たタマネギが、どんどん芽が育つて、今、ネギとして収穫して、食べています。野菜炒めにしますと、とても甘くおいしく頂けます。みなさんも、試されたいかがでしょうか。

五、春野菜の種をいろいろ蒔いています。

六、今年も、つくしを何度も採ってきて、はかまのところを鉢で切つて、炒め、たまごとじにして食べました。ちよつと苦みがあつて美味しく頂けました。

七、いまの幼児教育は問題だ、という思いをずっと持っていました。たとえば、私たちのした学習障害の研究で、

小学校一年から中学校三年まで、多くの親ごさんに、アンケートへの協力をお願いしましたが、その際、何か問題があれば書いて下さいと言ったところ、一番、問題行動を訴えられたのは、小学校一年生と二年生をお持ちの母さん方でした。驚きました。また、いま「小一プロブレム」という言葉があるようですし、小学校で担任希望をとれば、一年や二年には希望が少なくなります。これは、日本の幼児教育が問題を持つ証拠のように思えます。その一つの原因が、随筆でも取り上げましたが、幼児教育観の間違いにあるようです。

八、全体的にも、教育観の間違いは深刻だと思います。

月刊 こころのとも 第十四巻 四月号 (通巻 一六〇号)	平成十五年四月八日 〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 ^{サトウ}
---	---

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610-8-38660

